

07の講義内容 言語文化「東アジア漢文文化圏」その3(モンゴルと日本)

蒙古と日本とは、日蒙復興交流を果たし益々目が離せない。[モンゴル出身の相撲力士が活躍し、二〇〇六年、日本とモンゴルの合作映画「蒼き狼 地果て海尽きるまで」が封切りされている。](#)こうしたなか、言語活動としては、戦後初めての『[日蒙辞典](#)』が春風社から刊行されている。ネット上では「[モンゴル語辞典「近代」DB](#)」が詳しい。さらに、個人HPでは、「[言の葉](#)」に詳細なモンゴル語関係のことが紹介されている。参考資料：[清水幹夫編「電子モンゴル語辞典」](#)

モンゴル人民共和国は現在、中央アジア東部に位置し、日本の約四倍くらいの面積をもち、人口は約二〇〇万人、土地の平均高度は標高一五〇〇メートルの草原地帯が中心である。この草原地帯のも四季はある。春は砂嵐、夏はツアルツァ(殿様飛蝗に似た昆虫)、秋は茶色化した草、冬は凍てついた大地に山の雪景色という具合になる。夏に草原を訪れると馨しき花の香りが風に運ばれて辺り一面に漂う。陽の沈むのは夜八時過ぎになる。逆に、冬は昼間の時間が短いのである。作物は、八月中旬から十月中旬までの三ヶ月で馬鈴薯ジャガイモや小麦を収穫し、牧草の草刈りも重要な作業の一つである。実際、仏数学を学ぶ学生以外の若者は、この草刈りの手伝いをする。これが極寒の冬に家畜類の飼料となるのだ。人も家畜も塩(ホジル)を摂取する。岩塩によるナトリウムや塩素で食欲、消化促進を務めている。

この国の英雄チンギス・ハーンの末裔は、この高原での厳しい気候のなか、幕舎(ゲル)による生活様式を牧畜文化として継承し続けてきた。ここでは五つの家畜(マル)類である、駱駝(デメー)・牛(ウヘル)・羊(ホニ)・山羊(ヤマー)・馬(モリー)を飼育し、馬は乗馬用、食肉用、飲用(馬乳酒(アイラグ))に活用し最も貴重な財産でもあった。そして、この高原を家畜とともに遊牧し、私たちと同じく高度な仏教文化を築き上げてきたのがモンゴル国なのである。ここでの信仰はラマ教(大乘仏教)が中心で、七世紀頃印度からチベットを経て伝来した。現在、モンゴルの首都ウランバートルには、ガンダン寺とエルディニーズ寺があつてこの二つが遺る。ここでは、仏数学を学ぶ未来の僧侶達が日々修行に務めている。暦も十二支を用いていて、猪が豚であるところが異なる干支である。その住居は、ゲルという移動式のものである。このゲルの骨組みには柔軟な柳が材となっている。

言語文化面からみると、『[大元聖政国朝典章](#)』(蒙文直訳体)の詔勅文が知られている。征服王朝として、多重接触言語を用いることから、変体蒙文を作成している。この一部データは、「[元代文書史料研究会](#)」が公開している。

《HP資料》

- ※ <http://itako999.blog41.fc2.com/blog-category-18.html>
- ※ http://www.npm.gov.tw/ja/collection/selections_02.htm?docno=755&catno=14&pageno=2
- ※ <http://www.youtube.com/watch?v=bztuzYHUzcQ&feature=related>
- ※ <http://www1.ocn.ne.jp/~matsu03/books/aoki.htm>
- ※ <http://bbs.meishujia.cn/viewthread.php?action=printable&tid=34594>

『元朝秘史』（小澤重男著『元朝秘史全釈』風間書房刊を参照。他に岩波文庫本に小澤重男訳を収録する。村上正二訳注『モンゴル秘史1〜3―チンギス・カン物語―』（平凡社『東洋文庫』、一九七〇―七六年刊）一―二二八年成る―）

「普き民人を一つの手綱のもとに服わせる」までの歴史叙事物語。このなかで宗教的観念を見定めるに、天神崇拜と大地の神々を最も尊ぶ姿勢も見えている。このなかで最高統治者であるチンギスハーンの生い立ち、そして育み、大人としての生き方を学ぶことにもなっている。この半世紀後にチンギスの孫フビライが一二七一年に都を中国北京に遷した後、元朝の宮廷国家へと擡げていく時期であった。

『集史』宰相ラシード・アッディーン（パリ国立図書館蔵）

一二九五年、第七代イル・ハーンのガザン・ハーンは、宰相宰相ラシード・アッディーンの協力のもと政治経済の改革を断行していく。一三〇〇年にチンギス・ハーン一族の記録編纂を命じた。この歴史記録書が完成を見たのは一〇年後の一三一〇年、オルジェット・ハーンの時であった。この『集史』全三巻の中身は、巻一に、モンゴル史、巻二に、世界史、巻三に、地理編である。だが巻三は現存を見ない。巻一と巻二の二巻を見るに過ぎない。

巻一のモンゴル史では、第一部にトルコ・モンゴル系諸部族ごとの歴史を所載する。第二部でチンギス・ハーンの祖先の歴史、モンゴル統一から世界征服、諸ハーン國の歴史を所載する。

古諺を探る

「騎士道」の時代「雨が降っても槍が降っても約束は約束だ」（チンギス・ハーンのことば）

オルドス高原に立つ「チンギス・ハーン像」



西暦一二二七年、チンギス・ハーンが西夏を攻める時甘・の軍営でなくなった。遺体は諸王たちがチンギスカンの遺言のとおり、千里(地名)に運んでここに埋めた。今、阿爾巴斯(アルブス)山蘇木区内の千里堀と周囲一〇キロ以内はボラトウロハイ、ゴンシリ、ホウロトウ、アラタントウサン、チャンホウゴウなどの地名はチンギス・ハーンの葬儀、墓などに関する資料に合致する。

『元朝秘抄』に、「太祖二十二年西夏を討伐する時、閏五月六盤山に避暑して六月に西夏が降伏し、八月サリツウアンハツトウ行宮で崩御し、輦谷に埋めた」という記載がある。

書いた『草木子』（元明史料筆記叢刊）に、モンゴル帝王を送る言葉では「元諸帝の墓は起輦谷にある。元国は墓を作らなくて、埋めた後、何万もの騎兵で踏んで平坦な地にする。その後、子駱駝を殺しその上に置いて何千の騎馬兵がそこを守る。一年を過ぎて新しい草が芽を出すと、テントを撤収し帰る。だから、墓はどこにあるか知る人はいないのだ。祀る時には親駱駝を殺し、悲鳴をあげた場所

が墓だと決めた」と記載されている。

張穆が書いた『モンゴル遊牧記』を引用した「モンゴル源流」では、チンギス・カンが死亡後「金身を出すことができなくて大きい陵を作って保護した。そこには白い部屋八間がありアラタンサンインハダイサンヤンンのタオトコ地方だ」と記載されている。その後の文書では「だから歴史という起・谷は今のサイインノウエン右旗と鄂爾多斯（オールドス）右旗のあわせるところで間違いない」という。「アオトコウ」はまさに鄂托克（オトク）であることだ。これは鄂爾多斯（オールドス）右旗中旗の昔の言い方であり今の鄂托克旗（オトクキ）である。「モンゴル遊牧記」には「阿拉坦山（アラタンサン）はつまり右翼中旗の西北の阿爾布坦山（アジブタンサン）である。」と記載されている。

※鄂托克旗（オトクキ）モンゴル族は、旧暦お正月を「チャガンサル」という。「チャガン」は白い意味で「サル」は月の意味だ。モンゴル族は「白」を万物の母とする。主に純白は、おめでたいときに使われる。お正月の初めは「白い服」を着て過ごすのが伝統である。白い服は「吉服」とよんで白色は福をもたらすと信じられている。この習慣は草原で長い間伝わってきた。

蒙古國牒狀〔南都東大寺尊勝院所藏〕

上天眷命

大蒙古國皇帝奉書

日本國王、朕惟自古小國之君、境土相接、尚務講信修睦、況我祖宗受天明命、奄有區夏、遐方異域、畏威懷德者、不可悉數、朕即位之初、以高麗无辜之民久瘁鋒鏑、即令罷兵還其疆域、反其旄倪、高麗君臣、感戴來朝、義雖君臣、而歡若父子、計王之君臣、亦已知之、高麗朕之東藩也、日本密迓高麗、開國以來、亦時通中國、至於朕躬、而無一乘之使以通和好、尚恐王國知之未審、故特遣使持書布告朕意、冀自今以往、通問結好、以相親睦、且聖人以四海爲家、不相通好、豈一家之理哉、至用兵、夫孰所好、王其圖之、不宣、至元三年八月日

高麗國王王ハ、右啓、季秋向闌、伏惟大王殿下、起居万福、瞻企瞻企、我國臣事蒙古大朝、稟正朔有年于茲矣、皇帝仁明、以天下爲一家、視遠如迩、日月所照、咸仰其德化、今欲通好于貴國、而詔寡人云、海東諸國、日本與高麗爲近鄰、典章政理、有足嘉者、漢唐而下、亦或通使中國、故遣書以往、勿以風濤險阻爲辭、其旨嚴切、茲不獲已、遣朝散大夫尚書禮部侍郎潘阜等、奉皇帝書前去、且貴國之通好中國、無代無之、況今皇帝之欲通好貴國者、非利其貢獻、但以無外之名高於天下耳、若得貴國之報音、則必厚待之、其實與否、既通而後當可知矣、其遣一介之使以往觀之、何如也、惟貴國商酌焉、拜覆、至元四年九月日 啓 ○中略

奧書

文永五年二月之候、於西郊龜山殿大多勝院道場、勤仕後鳥羽院御八講之間、此程寄宿注性稱願房之住房之次、借請彼房主之本、即誂其房主、令書寫之畢、當時天下無雙勝事、只有此事、仍爲後覽所書寫之也、依諸卿之評定、返牒不被遣之云々、委細之事、追可尋記之而已、

華嚴宗末葉法印釋宗性 尊勝院、年齡六十七、夏臘五十五、神宮司廳『故事類苑 外交部』1983年、吉川弘文館、より抜粋。

蒙古国書 至元三年(一二六六・文永三年)八月

上天の眷命せる大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉る。朕惟んみれば、古より小国の君、境土相接すれば、尚努めて信を講じ睦を修む。(中略)朕即位の初め、高麗の辜なき民の久しく鋒鏑につかるるを以て、すなはち兵を罷め、その疆域を還し、その旄倪を反らしむ。高麗の君臣、感戴して来朝せり。(中略)高麗は朕の東藩なり。日本は高麗に密迹し国を開きて以来、また時に中国に通ず。朕が躬に至りては、一乗の使の以て和好を通ずるなし。尚恐らくは王国のこれを知ること未だ審らかならざらん。故に特に使を遣はし、書を持ちて朕が志を布告せしむ。冀はくは、自今以往問を通じ好を結び、以て相親睦せん。(中略)兵を用ふるに至りては、夫れ孰か好むところならん。王それこれを凶れ。不宣。(『調伏異朝怨敵抄』)《書下し文(抄)》関幸彦著『神風の武士像 蒙古合戦の真実』2001年、吉川弘文館、より抜粋。

『蒙古襲来絵詞』上・下二軸。国宝三の丸尚古館所蔵。竹崎季長の合戦上申。